吉川哲太郎先生を偲んで

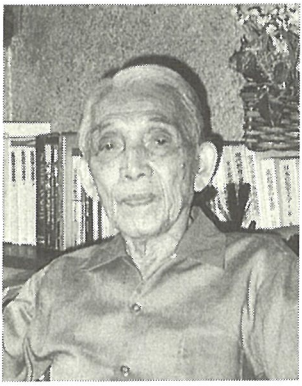
――デューイ教育学研究者として――

森　　章博
（大学文学部教授）

同志社大学名誉教授吉川哲太郎先生（一九〇〇・二・一九―一九九一・五・二六）が九一歳の生涯を閉じられて四カ月余り過ぎた。生あるもの必ず死に帰すのであるが、その生における「成長」という意味をジョン・デューイの研究を通じて実践的に実証しようとされた先生は、生涯を終る間際までその意志を貫かれた様に思われる。ご逝去の後に、実弟の吉川三郎様から先生の蔵書について「デューイ関係その他参考になるものがあればお持ち帰り頂きたい」とのことであったので、初めて先生の書斎を見る機会があった。私は、書斎の書物の悉くに目を通すことは出来なかったが、先生のライフ・ワークであったジョン・デューイ教育学研究の数々の著書や、文献に記された書き込みを見て、改めて、先生のデューイ研究に対する情熱の深さを思い、さらに先生の在りし日の種々のことが憶い出されて誠に感慨無量なものがあった。先生は英語発音の習得方法について興味を持たれ、私達にもよく話されていたが、そのケネテック・メソッドの『英語発音習得の理論と実際』という先生の著書もあった。また、大学紛争時、教育学専攻教員の会合が大学が封鎖されていた為に御自宅の応接室で毎日の様に開かれて、教育問題や指導の在り方を話し合ったこと、特に一九六九年六月十一日の文学部公開教授会が翌日午前一時過ぎまで続き、先生宅に泊らせて頂いたことなど当時の頃を偲んだのであった。

吉川先生は一九二一年同志社大学法学部経済学科を卒業され、神学の勉学の為にアメリカに留学、南カリフォルニア、オベリン大学神学部で勉学された。その間に教育の重要性を自覚して南カリフォルニア大学院教育学研究科で教育学を研究され、その過程でジョン・デューイの著書を教科書として学び魅力を感じられた様である。一九三一年四月より同志社専門学校講師となられ、以後四一年の永きに亘り同志社の教員として活躍され、その間、同志社外事専門学校長、同志社大学教務部長、大学院担当教授として教育と研究に非常に貢献されたことについては、本「同志社時報」（第八二号）の「吉川哲太郎名誉教授に聞く　同志社の社会的役割　聞き手　河野仁昭」で詳しく報じられている。また、先生とデューイ研究との関わりについては、一九七一年三月の「吉川哲太郎先生古稀記念論文

●吉川哲太郎氏略歴●



1900年２月　大阪府下で誕生
1921年３月　同志社大学法学部経済学科卒業
1927年６月　オベリン大学大学院神学部終了　B．D．の学位を受く
1930年６月　南加州大学大学院教育学研究科よりM．A．Edu．の学位を受く
1931年４月　同志社専門学校講師
1940年４月　同志社専門学校教授
1948年１月～1952年３月　同志社専門学校校長
1949年４月　同志社大学文学部教授
1950年８月～1954年９月　同志社大学教務部長
1952年４月　大学大学院文学部研究科教授
1970年２月　定年退職
1971年３月　同志社大学名誉教授の称号を受く
1991年５月26日４時22分永眠　91歳

集」の先生の筆に依る「デューイと私」に特に詳しいのである。要するに私の理解する処からすれば、先生御自身の性格に合った考え方をジョン・デューイの中に発見され、デューイに引き込まれて、生涯その研究に情熱を捧げられた様に思う。

私は同志社大学の学生になる約七カ月前即ち一九四八年八月に、大阪で先生からデューイの民主主義と教育について最初の話を聞いた。以後、学部・大学院で、さらに同志社大学に奉職してデューイ教育学研究のご指導を受けて来た。実に四〇年に亘って、学問的にも人間的にも公私共に本当にお世話になった一人である。先生は、ここ五年間は一人暮しで趣味としてパチンコに熱中されたが、自らの孤独に徹する意志を群集と喧騒の中にもまれながら確かめられていた様に思われる。そして、一日一日淡々として生活され、老境にはいられた様子に伺える。先生からは、忍耐すること、簡素にして節約すること、他人に媚びず自由に生活すること等々を教えられたが、最後まで明治の人として気骨を失われず、自由を愛し通された。九〇歳を過ぎられた先生は、生きておられるという事自体が真に価値あるものであると私達をして痛感させる様な御姿であった。

先生は教師と学生との関係で、後者が前者を恩師と考えることを好まれなかったし、また先生とデューイの関係も、デューイの思想を非常にすばらしいものとして絶対視することなく、常に生活の視点から彼の思想を理解し、デューイを民主主義社会の教育哲学者として位置づけられたのであった。先生は、御退職に当たりデューイ研究の為に役立ち同志社にデューイ思想を持続させたいと発意され、その基金に依って同志社大学学術情報センターに「デューイ文庫」が設立された。現在は和書、洋書など六三〇冊が納められている。先生は、一九九〇年秋にお目にかかった際に、御自分の遺産をさらにデューイ文庫の充実強化の為に捧げたい旨私に話されていたことが感銘深く思い出される。上の御写真はその時のものである。

慈父のごとき存在だった

――深田俊章先生――

喜　多　正　明
（香里中学・高等学校教諭）

深田先生は、明治四十一年、現在の摂津市庄屋にある西本願寺派の寺院永福寺に生まれられました。昭和七年三月、龍谷大学文学部を卒業されました。卒業論文「阿毘達磨の心理学的発達に関する研究」が認められ、「大学に残るように」とのお勧めがあった、と聞いております。先生は大学卒業とともに浪花高等女学校に英語科教諭としてお勤めになり、そこで生涯水魚の交わりをされる井規矩雄・東郷膳栄門両先生と机を並べられました。

井先生が吉野校長のお招きで第二山水中学校（香里学園の前身）に移られると、深田先生も昭和十九年に同校に転勤されました。戦時下の学校生活を「中学一、二年は農家の手伝い、三年は香里火薬庫での火薬製造、四、五年は昼夜交替で枚方造兵廠で兵器造り等に奉仕し、日曜は登校して授業を受ける生活の連続でありました。先生も生徒もくたくたに疲れました。ある日の教員会議で疲労こんぱいという言葉がでたとき、校長は烈火のごとく叱られた」と二十年誌に述べておられます。昭和二十年二月二十四日先生にもついに召集令状がきました。陸軍二等兵として金岡連隊に入営された先生は、やがて中支派遣軍に補充兵として出征され、二度三度死線をさまよわれ、戦没者の供養につとめられました。復員は昭和二十一年四月でした。

再び教壇に立たれた先生は、英語の授業に全力を傾注されました。中二の時間に「The sun was shining」と力を込めて言われるので、ついに先生のあだ名が「The sun」になってしまいました。

昭和二十六年同志社との合併直後には「昭和二十七年度の応募生徒が多数であることを希望して、井・小沢・青木・小川（藤）・中新井・上島の諸先生や私（深田）が、授業を午前中にすまして、北河内全域はもちろんのこと、大阪市内、豊能地区、布施方面まで生徒勧誘に出かけ」（二十年誌）られました。私たちは、先輩諸氏の努力の上に現在の香里があることを忘れてはなりません。

昭和三十三年、私は最初の礼拝奨励で、信仰心をたかめることを目的に「仏教では、仏壇のない家はたんなる小屋に過ぎない。仏壇があって初めて人間の住む家となる」と話しましたら、礼拝後私の所にこられて、若輩の私に頭を深々と下げて「先生、ありがとう」と言われたのには恐縮しました。

●深田俊章氏略歴●

1908年4月1日　摂津市庄屋永福寺にて誕生
1932年3月　龍谷大学文学部卒業
1932年4月　浪花高等女学校教諭
1944年4月　第二山水中学校教諭
1948年12月　香里学園中学高等学校教諭
1951年9月1日　同志社香里中学・高等学校教諭
1973年3月　定年退職
1991年1月2日9時25分永眠　82歳

下山校長は深田先生に全幅の信頼をおかれ、先生を補導主任に任命されました。深田先生を中心に副主任に石井先生、それに柴田・西島両先生と私で補導部を構成しました。折からの安保騒動で、下山校長は「生徒を政治運動に参加させないように」と指示されましたが、全国的な運動を一主任の力ではどうすることもできませんでした。一部の生徒は補導部を反動の砦みたいに思って「〝生徒の分際で政治活動するとは〟と補導主任」とか「学校ではアーメン、家では南無阿弥陀仏」といったビラをまきました。先生の在職中で補導部のときが一番辛かった、と思われます。

村岡校長のときにも先生は教務主任と校務主任を勤められましたが、先生の書かれた日誌類は詳細を極め、校史研究の重要な資料となっています。

昭和四十八年三月に定年退職されたときに「これからの余生は、世のため人のため〟一隅を照らす〟身となって、健康の許す限り少しでもお役に立ちたい」（香里の丘四十五号）と記しておられます。先生は在職中から保護司として受刑者の更生保護に努めておられましたが、昭和四十八年六月には藍綬褒章を受章されました。さらに摂津市社会福祉協議会の役員として〝心配ごと相談〟を担当され、多くの悩める人々の相談相手になられました。そうして昭和五十四年十一月には勲五等瑞宝章を受章されました。

昭和五十六年の同志社香里三十年記念事業のとき、三十年記念誌には「忍終不悔」の一文を寄稿され、教職員OB座談会では戦中戦後の苦しかったころの学園生活を語られ、記念式典祝賀会には元気なお姿を見せられました。

晩年には仏跡参拝団を率いて中国・インド・東南アジア等を訪問されました。昨年十一月教職員OB会には会長としてかくしゃくとしておられましたのに、平成三年一月二日突然永眠されました。今はハスの花咲く極楽浄土を夫婦手を取り合って歩いておられることと思います。先生の御冥福をお祈りします。